

J.F.マクドナルド、「ラッセル、ワイトゲンシュタインとサイの問題」、1993

MacDonald, J.F., 1993. Russell, Wittgenstein and the problem of the rhinoceros. *Southern Journal of Philosophy* 31 (4): 409-424

Rhino Resource Center: the World Largest Rhino Information Website

[http://www.rhinoresourcecenter.com/index.php?](http://www.rhinoresourcecenter.com/index.php?s=1&act=refs&CODE=note_detail&id=1165251908)

[s=1&act=refs&CODE=note_detail&id=1165251908](http://www.rhinoresourcecenter.com/index.php?s=1&act=refs&CODE=note_detail&id=1165251908)

サイは部屋にいるかい？バートランド・ラッセルと若きワイトゲンシュタインの出会いのひとつは、部屋にサイがいるかどうかについての議論だった。明らかにワイトゲンシュタインが「部屋にサイがないことは確実だと認めるのを拒否した」(refused to admit that it was certain that there was not a rhinoceros in the room)時、ラッセルは半ば冗談で、それを証明するため机の下を見た。だが証拠はなかった。「ぼくのドイツ人エンジニアはばかだと思う」(My German engineer, I think, is a fool,)とラッセルは結論した、「彼は経験的なものは知りえないと考える。ぼくは彼に部屋にサイはいないことを認めるよう頼んだが、彼は認めなかった」(He thinks nothing empirical is knowable - I asked him to admit that there was not a rhinoceros in the room, but he wouldn't.).[1] 論争の要点は、「主張された命題」(asserted proposition)に関する当時のワイトゲンシュタインが抱いていたテーゼであるようにみえる。ラッセルによれば、ワイトゲンシュタインは「主張された命題以外世界には何もなく」(there is nothing in the world except asserted propositions)、「主張された命題以外の何かが存在することを認めるのを」(to admit the existence of anything except asserted propositions)拒否した。[2] だがこのテーゼは何に至るのか、そしてどのように経験的に知りえるものはなにもないことについての、サイが部屋にいるかどうかは決定が困難だということについての彼の見解にどのように関係するのか？ひとつの点について、どのようにワイトゲンシュタインが自然科学の命題だけが語りえるという彼のアイディアの初期の思想にとって中心的重要性があるなら、経験的に知りうるものはなにもないと論じることができるのかを理解するのは難しい。もうひとつの点について、主張された命題以外世界には何も存在しないという彼の伝えられるところの発言は、主張されない命題しか存在しないという「論理についてのメモ」における見解と一致させるのは難しい。ここで必要なのは「論理についてのメモ」や他の場所でのワイトゲンシュタインの基本的な考え方と見解に対する関係を考慮に入れながら、彼の伝えられるところの発言を理解することができる解釈である。また、それはラッセルのワイトゲンシュタインへの極端な反応とワイトゲンシュタインがばかだったという彼の困惑について部分的に説明をしなければならない。

彼についての最近の伝記、『ワイトゲンシュタイン：人生』で、ブライアン・マガイネスは、ラッセルとワイトゲンシュタインの会話についての面白い解釈を提起する。それはレイ・モンクの

『ワイトゲンシュタイン：天才の義務』でも聞かれる。引き続いてわたしはマガイネスの解釈を批判し、その代わりに、「主張された命題」の読解の代わりとなる方法を提起する。この代替案は、『論理哲学論考』だけでなく、彼の後期哲学においても表明された基本的洞察をとまなう連続体としてワイトゲンシュタインの初期の思想を理解する方法を私たちに提供する。実際わたしが正しいならラッセルに対するワイトゲンシュタインの反論は『確実性について』と通常関連するアイデアを先取りするものである。[3]

マガイネスの解釈はワイトゲンシュタインが何を「主張された命題」で言おうとしたか、またなぜかれがサイについてのラッセルの意見がその資格がないと考えたかを整理することに依存している。その終わりで、彼は私たちがワイトゲンシュタインの反対を『論理哲学論考』でより適切に表現されているテーゼを表していると理解しなければならないと主張する。このテーゼは世界の論理構造に関係するとマガイネスと言う。彼の見解は「主張された命題だけが存在するという見解は、明確に、世界は概念によって作られるという、ムーアの1899年の論文『判断の性質』の立場の修正として意図されている」ということである。[4] マガイネスによれば、ワイトゲンシュタインの修正は、物ないしムーアが単純に概念と呼んだものではなく事実 — 主張された命題である事実 — からなるというアイデアに基づいている。そのためその修正は「世界が物ではなく、事実の総体である」 — 『論理哲学論考』の第二の見解 — というアイデアを先取りするようにみえる。[2]

マガイネスは「主張された命題」というフレーズは、ラッセルとムーアが定義した命題の表象の説明、ワイトゲンシュタインが知っていたのはほとんど確かな説明にとって中心的であることを気づかせる。マガイネスが言うとおりその状況はワイトゲンシュタインがラッセルとムーアに対する反対をすでに形成していたということである。それを彼はラッセルのとの会話で表明しようとしたのである。要するに、マガイネスはワイトゲンシュタインが「主張された命題」のフレーズで、ラッセルとムーアが言おうとしたことを言おうとしたと仮定する。[6]

「主張された概念」の概念は、命題内容がその本質的特徴であるというラッセルとムーアの信念やこの内容に関する判断における心理学的プロセスは二次的地位しかもたないという見解とつながっている。彼らの概念において命題は、ロックだけでなくロック主義者らなどにとっての心理現象ではない。[7] ムーアは命題を構成する実体を「概念」と呼び、ラッセルはそれを「用語」と呼んだ。この見解における命題は、ムーアが複合体であると理解したもの、あるいはラッセルが用語の集合と呼んだものである。それは精神的なものではなく、内在的、プラトンの実体の複合体ないし集合である。

ラッセルとムーアの概念において、事実は真の命題と同一である。真理は — 現代理論におけると同じく — (精神的ないし言語的実体とみなされる) 命題と何かほかのものとの関係ではない。そうではなく、それは複合体ないし用語の配列と今度は考えられる命題の特性なのである。一部の命題はただ真であることがあるが、それらの命題は事実であるとムーアは言う。

いったん、命題が(心理学的意味で)信念でも、言葉の形式を指示するのでもなく信念の対象を指示することを明確に認めるなら、命題はいかなる点でも、単に対応するとみなされる実在とは異なるというのは明白にみえる。すなわち「私が存在する」という真理は、いかなる点でも対応する実在「私の存在」とは異なるのである。[8]

真の命題ないし事実と偽の命題を区別するものは「主張されること」についてもつ質であるとラッセルは言う。

真の命題と偽の命題のようなものはある意味で実体であり、ある意味論理的な主題であること的能力であるが、命題が真の場合、それはさらに偽の命題と共有する以上の質をもち、それは心理学的意味と対立するものとして、論理的意味での主張によって私が言おうとしているものが、このそれ以上の質なのである。[9]

その場合、主張された命題は偽の命題から真の命題、事実を区別するラッセルの用語である。真の命題は、偽の命題が欠く「主張されていること」の特性をもつ。

マガイネスはワイトゲンシュタインがラッセルとの会話で「主張された命題」というフレーズのこの使用に戻っており、「主張された命題以外世界にはなにもない」と言うことによってワイトゲンシュタインは事実より基本的な何かがあるというラッセルとムーアの基本的仮定に挑戦することを意図していたと考える。ワイトゲンシュタインに帰せられる見解において、偽の命題は、ラッセルとムーアが考えたように「実体」ではない。何かがないため用語(ないし概念)の複合体はない。世界は、用語、概念、ないし物ではなく、諸事実からなる。

マガイネスにとって、その場合、ワイトゲンシュタインとラッセルの間の議論は「サイが部屋にいないことによって、どのような複合体が合理的に存在すると仮定しえるか」ということになる。[10] ワイトゲンシュタインが主張された命題以外も何もないと論じる際、この主張を否定していたにも関わらず、ラッセルはそのような複合体が存在するという見解をもっていたと考える。マガイネスに従えば、「(ワイトゲンシュタインは)主張された命題ないし主張以外すべてに対するこの意味で存在を否定していた。そのため、世界は諸事実からなり、…(そして)物、対象、あるいはムーアが単純に概念と呼んだものは世界を構成しない(という)…『論理哲学論考』の第一命題で表明された立場に彼はすでに達していた」。[11]

ワイトゲンシュタインの意見がムーアの立場の修正と「明確に意図された」というマガイネスの主張にもかかわらず、私たちは確実に彼の解釈を憶測とみなさなければならない。「主張された命題」というフレーズが出てきたこと以外、ふたりがムーアの論文ないし実際ムーラやラッセルの初期の見解の何かを議論していたことを示唆するレディ・オットラインへのラッセルの書簡にどんな直接的証拠もない。実際ラッセルの書簡に基づいて何かをはっきり認めるべきなら、それはラッセルがふたりが一体全体何か議論をしていたのかどうかについて困っていたということである。レディ・オットラインへの報告から現れるものはラッセルがワイトゲンシュタインが言っていたことではなく、彼が何かを言っていたかどうかを恐れていたということである。

これらの会話が実際彼らが出会って3週間程度で二人の間で非常に早く起きたことを思

い出さなくてはならない。その段階で、ワイトゲンシュタインの知的信頼性はまだラッセルにははっきりしておらず、彼はワイトゲンシュタインが「ばか」「はた迷惑」「変人」かもしれないと困惑している。[12] ワイトゲンシュタインの意見が「ムーアの立場の修正を明確に意図されていた」というマガイネスの主張はラッセルがワイトゲンシュタインに抱いた深刻な疑いを説明していない。それはふたりの議論の枠組みが真であったように見える以上に解決済みであったことを前提している。[13]

この点は、もしそうなら、マガイネスが自ら指摘するように、ワイトゲンシュタインに帰す立場は、既にマイノングについての議論でラッセルによって検討され、拒否されていることを特に、語っている。[14] マガイネスが正しいなら、どうしてラッセルが以前検討し、拒否した偽の命題や複合体の性質についての洗練された見解をワイトゲンシュタインが提起することが、ワイトゲンシュタインが単に間違っているのではなく、ばかとか迷惑とか変人であったかもしれないと、ラッセルをして疑わせしめたのかは、極端な難題となる。たとえワイトゲンシュタインが彼の立場をうまく言えなかったとしても、ラッセルはおそらく彼が以前検討した立場の可能性を認めることが(わずかであっても)できただろう。

マガイネスの解釈にともなう別の深刻な困難は、ワイトゲンシュタインが1913年の「論理についてのメモ」で「主張されない命題だけがある」と述べていることである。[15] 主張された命題についてのラッセルに対するワイトゲンシュタインの意見が『論理哲学論考』の始まりの見解を先取りするものなら、私たちは1911年と1913年の間に心変わりし、『論理哲学論考』を書くときに再び元に戻ったと考えなければならない。信じがたいことを除けば、これはマガイネス自身が初期の会話が『論理哲学論考』で後に表明されたアイディア、すなわちワイトゲンシュタインがまさにその初期に基本的アイディアが生まれたと主張していることを先取りしているという彼の論争を指示するため使っている事実逆行している。[16] ワイトゲンシュタインの思想の連続性はどのようなワイトゲンシュタインが「主張された命題」について心変わりすることができたか、そしてなお1911年と1918年に同じアイディアをまだもっていたかを理解するのをさらに困難にしさえする。ほんとうにわずかであっても、マガイネスがワイトゲンシュタインの初期と後の意見の間に連続性を訴えるべきなら、彼は私たちに主張されない命題に関する「論理についてのメモ」の意見について説明しなければならない。

マガイネスの読解に伴うさらなる困難は「何も経験的なものは知られえない」ということや、自然科学の命題だけが言われえるということ、ワイトゲンシュタインのアイディアとどのように一致させるかの説明を提供するのに失敗することである。実際、マガイネスは、世界の内容についてワイトゲンシュタインが引き出す私たちの知識についてのどんな結論もあまりに「憶測的」であり、「様々な、もっと普通の命題の性質についての仮定と混同することなく」述べられえないと論じる。[17] マガイネスの説明において、その場合、初期の会話に関する難問の重要な難問の部分が本質的に説明されえないままである。

最終的に、マガイネスの解釈において、「世界は物ではなく事実からなる」というような『論理哲学論考』に由来する意見は存在論的主張、ラッセルとの会話においてワイトゲンシュ

タインが先取りする存在論的主張であると仮定される。

マガイネスの見解はワイトゲンシュタインは『論理哲学論考』の最初の見解とラッセルに対する初期の反対において「ムーアを修正する」ことだったということである。これはワイトゲンシュタイン、ムーア、ラッセルが世界の諸特徴についての説明を与える、類似のプログラムを共有していたことを示唆する。マガイネスは、彼らに違いがあるとすれば、諸特徴が諸事実（あるいは主張された諸命題）か、概念からなるかどうかについてだけであるとマガイネスは考える。[18]

しかし、『論理哲学論考』における、世界と諸事実に関する最初の見解の論理的地位、そして実際にはその前の見解の論理的地位が決して解決されなかったことになる。実際、ワイトゲンシュタインにとって「世界は何からなるか」という問いはある意味非論理的であり、無意味であり、それに対する答えとして提起されるについても同様である。さらにワイトゲンシュタインはその目的が哲学的教理を提起することではなく、そのような教理が言語の論理の誤解に由来するようなものだとすることを示すことであったことを非常に明確にしている。[19] ウイトゲンシュタインが存在論的テーゼ（たとえ存在論的テーゼがすべてそのようなテーゼを台無しにするとしても）を提案していたと考えることによって、マガイネスはワイトゲンシュタインの反理論的意見の中心性を退ける。[20]

要約すれば、マガイネスの解釈はラッセルとワイトゲンシュタインの初期の会話を適切に扱うとに失敗する。それはラッセルの極端な反応を説明するのに失敗しているだけでなく、後にワイトゲンシュタインが短く表明した見解と矛盾する主張された命題に関するその見解に帰する。同様に、マガイネスは「経験的に知りうるものは何もない」というワイトゲンシュタインの伝えられる意見や、どのようにこれが自然科学の命題だけが語りうるという彼の考えと一致するかほとんど提示していない。最後に、マガイネスの解釈はワイトゲンシュタインの関心が哲学理論を提示することにあると仮定しているが、その考えはワイトゲンシュタインの初期の（そして後期の）哲学の基本テーマに反する。ワイトゲンシュタインのラッセルにたいする反対を明確にする第一段階として、ワイトゲンシュタインがその初期の会話の2年前以内に書かれた「論理についてのメモ」における「主張」の2つの使い方を区別するのが有用である。ひとつの用法は、ワイトゲンシュタインはラッセルが論理的なものと心理学的なものを混同していると考えているのを批判する時「主張」について語る。彼は判断、問い、命令などはみな同じレベルにあると言う。それらの中で論理に関係するものは主張されない命題だけである。主張されない命題だけがある。主張は単に心理学的である。[21]

この用法で、ワイトゲンシュタインは命題の論理的特性と、何かを主張することの心理学的様相とを混同していることに関してラッセルとフレーゲを批判する。

ワイトゲンシュタインにとって、主張は、ラッセルにとってそうであるように、命題の特性ではなく、また私たちが命題の實在的論理的特性から主張を解放する時、私たちには「主張されない命題」だけが残されるのである。私たちの目的にとって、理解すべき重要なことは、ラッセルの意味での「主張」に関するワイトゲンシュタインの用法だけが重大だということである。

ある。この段階で彼はラッセルが言おうとするもの「主張された命題」によって意味される「主張された命題だけが存在する」とは言わなかつただろう。というのも「論理についてのメモ」の議論とは反対に、彼が「主張された命題」が首尾一貫した概念を表現していると考えたとそれは前提しているだろう。

彼の第二の用法で、何が主張されえないかを決定する、主張することが無意味であろうことを示す文脈における「主張」について語る。そのためワイトゲンシュタインは「命題はそれ自身真であることを主張できない」と言う。ラッセルの「複合体」は混ぜられることの有用な特性をもつとこであり、これと「単純なもの」のように扱われえる合意できる特性を結びつけることであったと彼は言う。だが、これだけでは単純なものの主張において意義をもたないため、すなわちそれは複合的なため、論理的タイプとして役立たない。

同様に諸タイプは、あるものがこの特性をもち、他のものがあの特性をもつと(しばしばなされるように)言うことによっては、両方のタイプのこれらすべて互いに区別されえないと彼は宣言する。というのもこれは両方のタイプのこれらすべての属性において意味があることを前提するからである。[22]

1914年に書かれた「ノルウェーで G.E.ムーアに口述したメモ」で、ワイトゲンシュタインは再びラッセルのタイプ理論の無意味な主張によって表現しようとしているものについて語るとき、この主張の第二の意味を使用している。[23]

その場合「論理についてのメモ」で、ラッセルの「主張」の概念が一貫したものでなく、この信念が第二の意味で言及された主張のワイトゲンシュタインの用法で有意味に主張されえるものに関係していると考えたのは明白である。「論理についてのメモ」がラッセルとの初期の会話でワイトゲンシュタインが何を言いたかつたかについて手がかりを与えるなら、その証拠はそれゆえ、彼がラッセルの意味での「主張された命題」を用いたことに反する。実際、ワイトゲンシュタインのアイディアの連続性を強調するなら、ラッセルの意味での主張された命題という用語法に反対していたということはある。というのもラッセル自身が信じていることにも関わらず、ラッセルの主張の意味は心理学的であるため、命題の性質についての混同を密かに示していると彼は言った。もっとありそうなことは、ワイトゲンシュタインは何が有意味な主張か否かとみなされるかを決定する意味で「主張」を用いていたということである。「主張」によってワイトゲンシュタインがラッセルとの会話で意味に関心をもったという仮説を追うなら、ある興味深い解釈の説に焦点が当たる。というのも私たちは、「この部屋にサイはいない」というラッセルの命題が有意味に何かを主張するかどうか疑問であるものとしてラッセルに対するワイトゲンシュタインの反対を理解することができるからである。この解釈に関して、「主張された命題以外世界には何もない」という際、ワイトゲンシュタインはラッセルの命題、この部屋にサイはいないは、何かを主張しているようにみえるが、実際はそうではないと議論しているのである。ラッセルの命題は何も主張していないため、その発語は何かを主張する命題だけが有意味であるという単純な理由のため無意味である。ラッセルのサイについての命題はそのためワイトゲンシュタインが「ノルウェーで

G.E.ムーアに口述したメモで「無意味な主張」と呼んだもの、そして彼が『論理哲学論考』で「無意味な擬似命題」と呼んだものを表現するだろう。[24]

マガイネスに反対して、私はラッセルとの会話でワイトゲンシュタインが採用した「主張された命題」の概念が、ムーアとラッセルがそれによって言おうとしたこととは根本的に異なっていたかもしれないと言っているのである。ワイトゲンシュタインがラッセルとムーアの命題の概念を取り入れてからはるか遠く離れて、彼はラッセルが適切な命題と無意味な擬似命題とを混同したその根拠においてそれに挑戦していたのかもしれない。この解釈において、彼はラッセルとムーアが命題の性質について研究を進めていたまさにその枠組に挑戦していた。彼はマガイネスが仮定するようにその枠組内考え、「ムーアを修正」していたのではなく、足をすくおうとしていたのである。この解釈の説にとっての多くの困難はサイについてのラッセルの陳述についてなんらかの問題があるように見えないということである。「もちろん」私たちは「ラッセルとワイトゲンシュタインの部屋にはサイはいない」と言いたくなる。事実、ラッセルの部屋が私たちの部屋と同じようであったなら、真なる命題のよりよい例とはどんなものでありえただろうか？その場合、どのようにワイトゲンシュタインがそのような陳述が無意味な擬似命題であると考えることが示唆しえるのか？

しかし「この部屋にはサイはいない」が明白に云う意味な主張だとみなされることを議論する前に、私たちは立ち止まって、ワイトゲンシュタインがサイについてのラッセルの命題と驚くほど類似した「命題」が無意味であると論じる『確実性について』における晩年の見解を検討しなければならない。いくつかの例は次のものがある。「手がある」「私はそこに椅子があると知っている」「地球は人類誕生のはるか以前からある」「私はここにいる」。これらの明らかな「主張」は『確実性について』におけるワイトゲンシュタインの挽白のための材料であり、うわべは少なくとも「この部屋にサイはいない」というラッセルの主張と同じく常識的で否定しがたい。

『確実性について』におけるワイトゲンシュタインの主張は、世界がある仕方についてであるように見える、これらのいわゆる主張は、私たちが世界について、世界の論理について語る仕方「について」の主張であって、少しも世界についての主張ではないということである。例えばムーアは、彼には手があることを知っており、「私には手がある」ことが世界についての主張であると考え。だがワイトゲンシュタインにとって、そのような命題は主張でなく、私たちが世界について主張をする時、私たちにとって「信念を固守すること」なのである。たとえばムーアは、彼が何を知っていると主張するかについて知っておらず、私にとっても同じように、彼の信念を固守しており、絶対に確実なものとして、それを考えることは、私たちの懐疑や探求の方法の一部であると私は言いたくなる、と彼は言う。[25]

ムーアの命題が私たちが知ることができ、主張できる何かであると私たちが信じるようムーアが意図している限り、ワイトゲンシュタインはそれを無意味とみなす。彼の「不発の試み」においてムーアは、何が「私たちの指示の枠組みに属するか」を記述しようとしている、とワイトゲンシュタインは言う。[26] すなわち、彼はそれなしには、正しい判断の基準を失うと

いう意味でのみ真である命題を列挙しているのである。

ある特定の経験的命題についても判断することがまったく可能であることなら何ら疑いはないという事実に興味を抱いている。あるは繰り返せば、私たちは経験的命題の形式をもつすべては、ひとつではないと信じがちである。[27]

面白いことに、ワイトゲンシュタインは彼が何が主張されえるかについて指摘するため『論理哲学論考』と初期の著作の用語法に立ち返る。彼はたとえば言う。私の人生はそこにイスとかドアとがあると私が知り、確かに思う — 私が友だちに言うなど — を証明する。「むこうのイスをとってくれ」、「戸を閉めてくれ」とかとか。[28]

ワイトゲンシュタインは「むこうのイスをとってくれ」ということは意味をなすと考えるが、「むこうにイスがある」を主張するのは(少なくとも普通の状況で)意味をなさないと考える。この最後の主張は常識的にみえるかもしれないが、ワイトゲンシュタインは有意味に主張されえないと言う。彼にとって、前者の意見だけが主張されえる。見かけにかかわらず、反対に、「むこうにイスがある」は、「存在しない」という単純な主張と理解するというかもしれない。

しかし、「私には手がある」というようないわゆる「事実」と「私は手に傷をおっている」と私が言うことの間にはある関係がある。前者は私が後者を言う際、示される。私に手があるということは前提されており、「私は手に傷をおっている」と言う主張に対する「背景」を形成する。[29] だが正確にそれが背景をなすため、それについて主張したり何かを言ったりすることはワイトゲンシュタインの説明においては無意味である。

私たちは『確実性について』の見解を念頭におけば、「この部屋にはサイはいない」が完全に正統に語るべきことだという私たちの当初の仮定は、権利放棄をし始める。その場合、私たちにとっての問題は、そのような命題を問うことができるかどうかではない。というのもこれまで見てきたように、ラッセルのような命題は正確にワイトゲンシュタインが後期の哲学で何度も批判してきたタイプのものだからである。そうではなく問題は初期のワイトゲンシュタイン哲学において、特にラッセルとの会話においてワイトゲンシュタインが、『確実性について』で表明したような命題と区別していたかどうかということである。問題は命題を作るための「背景」に属するもの対するものとして、命題とみなされたものの意味をラッセルとの初期の会話の際、すでにもっていたかどうかである。ラッセルが無意識に日常的な会話にした「この部屋にサイはいない」というラッセルの主張を「背景の命題」とワイトゲンシュタインがみなしたと考えるはもっともらしいのか？そして「主張された命題を除いて世界には何もない」という答えにおいて、ワイトゲンシュタインがラッセルが世界についての命題と考えるものが実際はまったく命題ではないとラッセルに指摘しようとしていたと考えるのはもっともらしいのか。

この解釈において、ワイトゲンシュタインは「背景」についての「命題」が、命題ないし主張であることにまったく抗議していたのである。そして存在する唯一の命題は日常生活において使用される日常的命題、「哲学にはどうすることもできない」『論理哲学論考』において言

及される自然科学の命題のような命題、そして語られえる唯一の命題でなのある。[30]
この読解における「主張された命題」は日常的状況において使用される命題のような何か、何かを言ったり使用したりするため、真か偽であるとか、二値的であると言われえる何かである。反対に、日常的状況において命題を主張するための背景について存在するラッセルの陳述は、真とか偽とかであると言われえず、二値的でないため、主張された命題という資格をもたない。[31]

ウイトゲンシュタインは『論理哲学論考』や初期のメモで「背景」というフレーズを使っていないが、後のアイデアの背後にある有意味と、無意味を区別する手段をもっていた。とくに彼の画像、それゆえ命題についての「Form der Abbildung」、すなわち「表象形式」のアイデアは、彼の後の「背景」のアイデアを先取りしている。[32] これらの用語で述べられれば、際についてのラッセルの主張とのトラブルは、表象されえない何か、表象形式に属する何かを表象することを主張しているということである。[33] ウイトゲンシュタインの視点から見て、ラッセルはサイについての命題を「膨張」させ、彼が世界について主張をするようにみえる「遠近法の幻覚」を生んだのであった。この幻覚の下にあるかぎり、ラッセルは彼の命題が単純な日常生活の主張以上の何かでありえることを考えさえしなかったのである。[34]

初期の会話のこの読解は、ウイトゲンシュタインが「経験的なものは何ら知りえないと考える」というラッセルの報告とピッタリ合わせるのに有利である。ラッセルが表象形式についての「命題」を経験的命題と理解したのなら、その場合、彼はそのような経験的命題の拒否としてウイトゲンシュタインの反対をまったく自然に解釈しただろう。しかしウイトゲンシュタインは経験的命題を拒否してはいなかった。「別の部屋の椅子は黒い」というような命題を経験的で知り得るものと受け入れたらう。そうではなく彼は経験的命題であると主張されながら、そうではない命題を拒否していた。同様に私たちはウイトゲンシュタインが「すべての存在に関する命題が無意味であると主張した」とラッセルが後に回想したことを理解できるのである。ふたたび、ウイトゲンシュタインは有意味な存在に関する命題として「他の部屋に黒いイスがある」を受け入れることに何ら問題をもっていなかったのである。そうではなく彼が無意味であるとみなしたのは、「この部屋にはサイはいない」というラッセルの主張された命題であった。[35]

私たちはまた、ウイトゲンシュタインに対するラッセルの極端な反応や、なぜ彼がウイトゲンシュタインが馬鹿とかはた迷惑とか変人だったかもしれないと疑ったかもっとよく理解できる。というのもウイトゲンシュタインの『確実性について』を読んだ人はだれでも実際もったのが確実であるように、「ここに手がある」というような明白に無邪気な「命題」が反対されえると考えられうるというような当惑の感情をラッセルはもったであろう。実際、ラッセルの反応がどれくらい自然かを強調するのは重要である。結局、私たちのほとんどは「この部屋にサイはいない」と考えるのに何ら問題をもたないだろう。私たちがしなければならないすべてのことは、部屋を見回すことであり、サイが部屋にいないのは絶対に確実にみえる。

哲学的なケースで、私たちが実際にそのような信念について懐疑論的問いを立てるのは本当である。だがラッセルは彼とウイトゲンシュタインが懐疑論的なよく知られた議論をやっていたという会話の報告を何ら示していない。事実、ラッセルは、誤りであっても、本物の立場として懐疑論に関して、ウイトゲンシュタインとは異なっており、ウイトゲンシュタインが懐疑論の立場を議論していたのなら、彼の反応はそんなに極端ではなかったのは確実だろう。[38] 部屋の机の下を見ることによってウイトゲンシュタインをラッセルがばかにしたことは、彼がウイトゲンシュタインが信じがたい懐疑論的議論を拒否してたのではなく、ラッセルがウイトゲンシュタインを変人として厄介払いしたことにさらに関係しているように見える。さらに、私たちはサイの意見にたいするウイトゲンシュタインの拒否が「主張された命題以外世界には何もない」という肯定的な論点の一部及び断片であったことを忘れてはならない。これは懐疑論の見解のように聞こえない。(そしてラッセルの後の逸話によれば、彼の反対が、存在に関する命題の意味に関係したことも想起すべきだ)。要するにウイトゲンシュタインが、私たちが知らないことについてではなく、有意味に語り得ることについて指摘していたように見えるだろう。

その場合ラッセルを困らせたのはウイトゲンシュタインが懐疑論的仮説を大胆に主張したことということではありそうにない。もっとありそうなのは彼は — ウイトゲンシュタインがばかか、はた迷惑か、変人であったかもしれないと疑ったという点で — ウイトゲンシュタインが実際に部屋にサイがいないというラッセルの明らかに無邪気な主張に反対したことに困ったということである。私の解釈では、ウイトゲンシュタインは日常的主張の一種であるふりをしている限りにおいて、ラッセルの陳述の意味を疑問に付したのである。そしてたとえば「ぼくは一度も月に行ったことがないことはわかっている」というような命題の意味について反対可能な何かがあるということが明白な以上に、サイについての命題の意味についてなぜ反対可能な何かがありえるかどうかは直ちに明白ではないのである。[37]

だから、ラッセルに対するウイトゲンシュタインの反対は事実『確実性について』やその他にいて議論された種類の無意味に対する関心によって動機づけられたいたなら、[38] ラッセルと初めて会った時に表明された見解と、彼の晩年に表明された見解との間には重大な連続線がある。

しかしこの連続線を引くことは、通常認められるより初期ウイトゲンシュタインとラッセル(フレーゲ)との間の非常に大きなギャップを認識することが求められる。言い換えれば、これは『論理哲学論考』がコーラ・ダイヤモンドや他の者たちが論じたように無意味に対する関心を表現したものと解釈されるべきなら、私たちは彼の初期のラッセルとの「共同作業」におけるこれらのアイディアの発展に真面目に振り返ろうとしなければならない。この論文の最後に、ウイトゲンシュタインが初期の会話で、すなわち「この部屋にサイはいなかったのは確かだった」(it was certain that there was not a rhinoceros in the room)と認めるのを拒否したと言ったのはどういうことか思い出す価値がある。[39]

注

1. ラッセルとワイトゲンシュタインの会話についての情報は、主なふたつのソースに由来する：ラッセルの Lady Ottoline Morell 宛書簡と、ワイトゲンシュタインの死に際して印刷された『Mind』誌におけるラッセルの記事である。ワイトゲンシュタインの最初の登場はラッセルの1911年10月18日の書簡にはじめて記録されており、サイについての議論は10月19日と11月2日の間に書かれたラッセルの書簡に現れる。『Mind』誌における記事でラッセルはその議論はカバについてであって、サイではないと記しているのは興味深い。また机の下を見たというラッセルの主張は Lady Ottoline Morell 宛書簡には現れない。Bertrand Russell, 'Ludwig Wittgenstein,' *Mind* 60 (1951), 297-298、ラッセルの書簡は Brian McGuinness, *Wittgenstein: A Life* (Berkeley and Los Angeles: The University of California Press, 1988), 88-89 と Ray Monk, *Wittgenstein: The Duty of Genius* (London: Vintage, 1990), 38-40.に再掲載された。引用は McGuinness, p. 89 より。
2. 「主張された命題」についてのワイトゲンシュタインの伝えられるところの見解は、ラッセルの1911年11月7日と13日の書簡に現れる。Monk, p. 40.を見よ。
3. 私の反対は、ワイトゲンシュタインの初期の見解の別の読解方法を示唆することに関するマガイネスの仮説について問うものである。私はその初期の会話の決定的解釈を提供するとは主張していない。マガイネスが指摘する通り、そうできるためにはあまりに情報が乏しい。
4. McGuinness, p. 91.
5. Ludwig Wittgenstein, *Tractatus Logico-Philosophicus*, D. F. Pears and B. F. McGuinness (trans.) (London: Routledge & Kegan Paul, 1961), remark 1.1. (ルートヴィヒ・ワイトゲンシュタイン『論理哲学論考』)
6. ニコラス・グリフィンがマガイネスの解釈を繰り返す。「ワイトゲンシュタインが一点で経験的命題は知りえないと存在する唯一のものは主張された命題であるという見解を擁護していると私たちは知っている。これらの見解から、第二の見解が『プリンキピア・マテマティカ』における主張された命題についてのラッセルの説明に基づいていることを除いて、ワイトゲンシュタインの哲学について結論を引き出すことはほとんどできない」。Nicholas Griffin, 'Ludwig in Fact and Fiction,' *The Journal of the Bertrand Russell Archives* 12 (1992), 79-93.を見よ。引用は p. 89 より。
7. ムーアがバークリーの観念論に反対して命題の実在論的概念を発展させたが、彼の実在論のバージョンもまたイギリス経験論に由来する観念の概念に対するアンチテーゼであるということを心に留めておかなければならない。この問題についてより詳しくは John Passmore, *A Hundred Years of Philosophy* (Harmondsworth: Penguin Books, 1966), 202-204.を見よ。観念論に対する実在論者の反応の詳しい分析については Peter Hylton, *Russell, Idealism and the Emergence of Analytic Philosophy* (Oxford: Clarendon Press, 1990)を見よ。
8. 引用は Passmore, p. 203 より。
9. Bertrand Russell, *The Principles of Mathematics* (New York: W. W. Norton & Company, 1938), 49. (バートランド・ラッセル『プリンキピア・マセマティカ』)
10. McGuinness, p. 91.

11. Ibid.
12. McGuinness, p. 89. ラッセルの後のサイの会話についての逸話は、ワイトゲンシュタインについての初期の疑いについて光を当てる。「まったく最初私は彼が天才なのか変人なのかわからなかったが、すぐに前者を支持すると決めた。彼の初期の見解の一部は決めることが難しくさせた。彼はたとえばある時すべての存在に関する命題は無意味だと主張した」。ラッセルがレディ・オットライン宛の書簡でその時彼がワイトゲンシュタインは「経験的なものは知りえない」と考えている言う一方で、「すべての存在に関する命題は無意味である」と主張したとラッセルが言うことに注意せよ。私が示唆するとおり、知りえないことに対立するものとして「無意味」である命題についてのラッセルの後の見解は、ラッセルがこれら異なる公式にほとんど気にしていないのはまったくありそうだが、問題の核心により近い。McGuinness, p. 89を見よ。
13. もうひとつのラッセルの有名な逸話にしたがえば、ワイトゲンシュタインはラッセルに彼(ワイトゲンシュタイン)が「まったく哲学で望みがない」かどうか、そしてそのため彼が航空工学に進むべきか哲学に進むべきかたずねたという会話は、サイの会話の3週間後以降1911年11月27日までは起きなかった。ワイトゲンシュタインの問いに答えて、ラッセルは「私はわからないと話したが、そうだとは思わなかった。私は彼に何か判断するのに役立つ物をなにか書いてもってくれと頼んだ」。サイの会話の3週間後のようであり、ラッセルはなお疑念を抱いていた。Monk, p. 40を見よ。
14. McGuinness, p. 90.
15. Ludwig Wittgenstein, 'Notes on Logic,' Notebooks 1914-1916, 2nd rev. ed., G. H. von Wright and G. E. M. Anscombe (ed.) G. E. M. Anscombe (trans.) (Oxford: Basil Blackwell, 1961), 95. “Notes on Logic”(「論理についてのメモ」と“Notes Dictated to G. E. Moore in Norway”(「ノルウェーで G.E.ムーアに口述したメモ」)は1914年から1916年にかけて印刷された。今後私は単に、1914年～1916年のノートブックに付けられたページ番号に従って「論理についてのメモ」と「ノルウェイで G.E.ムーアに口述したメモ」を参照する。
16. M. O'C. Drury, 'Conversations with Wittgenstein,' in R. Rhees (ed.), *Recollections of Wittgenstein* (Oxford: Basil Blackwell, 1984), 158を見よ。「私の基本的アイデアは人生のごく初期に生まれた」(my fundamental ideas came to me very early in life)。
17. McGuinness, p. 92.
18. マガイネスが『論理哲学論考』を存在論的に読解していると主張するとき、私は彼がワイトゲンシュタインは(少なくとも最初に)言語の性質と世界の性質の(そして広い意味でラッセルとムーアと同じような)説明を提起していると考えているのである。私はマガイネスが、ワイトゲンシュタインの狙いの究極的目的が、そのようなすべての説明のバカバカしさを示すことだと考えるほとんどの解釈者たちと異なっていることに気づく。それにもかかわらず、マガイネスの解釈において、言語と世界の哲学的説明のバカバカしさを示すことに成功していることはワイトゲンシュタインが最初に提示する説明の修正を私たちが理解しなければならない。言い換えれば、私たちはワイトゲンシュタインの(言語的)存在論は究極的な「語りえない性」の帰結を導くことが出来る以前には正しい。私の見解ではこのようにワイトゲンシュタインを解釈することは、たとえこの教理が適切に語りえないとしても、哲学的教理についてのワイトゲン

シュタインの放棄とは反対に、結局彼が教理をもっていること認めることである。マガイネスの見解について更に詳しくは、Brian McGuinness, 'Language and Reality in the Tractatus,' Teoria (1985), 135-144を見よ。

19. Tractatus(『論理哲学論考』), p. 3, 4.003, 4.112, and 6.53 などを見よ。この哲学的理論の拒否は「論理についてのメモ」や『論理哲学論考』に現れる。p106を見よ。そこでウィトゲンシュタインは「推論のない哲学ではそれは純粋に記述的である」、「哲学は実在の画像を与えない」と言う。
20. これを言い換えると、マガイネスは「怖気づいて逃げ出す」ことなく『論理哲学論考』をいかに読解するかに関するコーラ・ダイヤモンドが提起した問題に十分真剣に理解していなかったということである。ウィトゲンシュタインが言うように、彼自身の命題が無意味であるなら、どのようにウィトゲンシュタインが言語や実在の説明を提示しえるかを理解することは、その説明が言語的であれなんであれ、難しい。次のダイヤモンドは正しい。『論理哲学論考』における命題の地位はすべてマガイネスが仮定することとはまったく異なる。Cora Diamond, The Realistic Spirit (Cambridge, Massachusetts: The M. I. T. Press, 1991), 179-204を見よ
21. Wittgenstein, 'Notes on Logic' pp. 95 and 96.
22. 'Notes on Logic,' p. 103 and pp. 100-101 (「主張すること」と「意味すること」の場合の両方のケースで私は強調した)。
23. Wittgenstein, 'Notes dictated to G. E. Moore in Norway' p. 110.
24. 'Notes dictated to G. E. Moore in Norway' p. 110 and Tractatua, 4.1272.
25. Ludwig Wittgenstein, On Certainty (New York: Harper & Row, 1969), paragraph 151.
26. On Certainty, paragraphs 37 & 83.
27. On Certainty, paragraph 309.
28. On Certainty, paragraph 7.
29. On Certainty, paragraph 94.
30. Tractatua, 6.53.
31. 彼の後期哲学で、背景についての陳述は文法規則とみなされるだろう。この関係で、1930年代初めの講義で、ウィトゲンシュタインは「カバが私たちの部屋にいない」という仮説を受け入れることによって(すなわちそれを文法規則と理解することによって)、要求される変化」を議論している。ウィトゲンシュタインの要点は、文法規則として、「背景」に帰属する何かとして「私たちの部屋にカバがいる」ということを受け入れることは、私たちの日常的なものの見方を根本的にひっくり返すだろうということだ。それは「奇妙な変化」と彼が言うものを必要とする。ウィトゲンシュタインはあからさまにそれについて言及していないが、私たちがその命題を文法規則として受け入れないこと言うことを、「私たちの部屋にカバはいない」ということが私たちが受け入れた文法規則であり私たちの表象形式に帰属すると受け入れないと彼が考えるのは明らかにみえる。後期ウィトゲンシュタインの別の見解が、「部屋にはカバはいない」というような命題が異なる役割を演じるものとして、すなわち文法規則として、あるいは文脈に依存する経験的命題として命題をみなしていることをした方がいいだろう。Alice Ambrose (ed.), Wittgenstein's Lectures: Cambridge 1932-1935, (Chicago: The University of Chicago Press, 1982), 70を

見よ。

32. “Form der Abbildung” (表象形式)という表現は「画像的形式」(pictorial form)とピアとマガイネスによって翻訳され、オグデンとラムジーによって「表象形式」(form of representation)と訳された。目下の目的にとって、私たちはふたつの訳語を区別することにあまり重要性があるとは思わない。私は表象の手段と表象されるものを区別するワイトゲンシュタインの関心をもっと明確するため「表象形式」を使おうと思う。Ludwig Wittgenstein, *Tractatus Logico-Philosophicus*, 2nd rev. ed., C. K. Ogden and F. P. Ramsey (trans.) (London: Routledge & Megan Paul, 1933), 2.15 and 2.17を見よ。
33. 私たちは、ワイトゲンシュタインが「論理についてのメモ」における「命題形式」と言うフレーズの使用にしばしば言及する際に先取りされた、表象形式が表現されえるアイディアの要素であるとおそらく考えることができる。たとえば彼は命題形式を物と混同することについてラッセルを批判する。'Notes on Logic' p. 105を見よ。初期の彼の哲学におけるこのアイディアについての完全な議論は私の手に届くものではない。
34. 「遠近法の幻覚」という用語は、コーラ・ダイヤモンドに由来し、それは彼女が厳密に言って無意味である命題によって哲学において作られると考える幻覚をさす。しかし私は、ワイトゲンシュタインにとって、たとえば「ソクラテスは同一である」というのは、「同一である」(identical)が形容詞的意味を与えなかったので無意味であるというように、これらの「無意味な命題」がある意味を与えられたなかった記号を含むものと理解されなければならないという彼女の解釈に同意できない。私の見解ではワイトゲンシュタインは「uninformativem」(独:役に立たない)と関係があり、私たちの表象の手段の要素を誤解させる無意味さのより強力な概念をもっている。再び、この見解をここで擁護することは私の手に届くものではない。Diamond, p. 196.を見よ。
35. 数年後、ワイトゲンシュタインが『論理哲学論考』を会話で説明する機会を持ったとき、ラッセルは世界についてのいかなる主張も無意味だというワイトゲンシュタインの見解に同意しなかった。議論の間、ラッセルは公然と白い紙を取り、3つのインクの染みをつけ、3つのインクの染みがあるため、少なくとも世界に3つのものがなければならないことを認めるようにワイトゲンシュタインに迫った。ラッセルによればワイトゲンシュタインは「それは有限の主張だから紙に3つの染みがあるのを認めたが、全体としての世界についてはまったく語り得ることがあるとは認めようとはしなかった」。ラッセルは「彼の教理のこの部分は私の心には絶対誤りである」と付け加えた。ワイトゲンシュタインが「有限の主張」で言おうとすることは、問題の初期の会話で「主張された命題によって言おうとしたと私が示唆していることに類似している可能性があり、それはこの後期の会話が、モンクがラッセルの意見を引用した初期の会話がかバーしたのと類似の領域をめぐるものであるということとはまったくありそうである。Monk, p. 182.
36. ワイトゲンシュタインが「懐疑論は反駁できないが、明白に無意味だ」と言うのを想起せよ。Tractatus (『論理哲学論考』), 6.51.
37. On Certainty, paragraph 111.
38. ワイトゲンシュタインの哲学がこの点に同様に動機づけられていると言うことは彼のふたつの哲学的機関の間の本質的な違いを否定するものではない。私たちが避けなければならない唯一のことは、ワイトゲ

ンシュタインの『論理哲学論考』の批判が、おそらく不適切な形式においてではあったが、『論理哲学論考』において最初に表明された結界の発展ではないという誤謬である。

39. 強調して付け加える。私は Paul Genest, Paul Forster, そして特に Andrew Lugg に、その有益なコメントに関して感謝を述べたい。